

# 短編小説 『鉄道員』 whitecaps

注意…この小説は浅野次郎作の短編小説『鉄道員』（同名）とは一切関係ありません。

###

その日は、冬の寒い日だった。

いくたとおる

地下鉄の駅員の幾田透は、いつも通り駅のホームにたつて、駅を通過する電車をさばいていた。手には電車の車掌に合図を送るためのランプを持っている。今はちょうど先ほどの勤務交代で、先をやっていた人に代わりホームの監視の仕事に入ったところだ。

外は雪だと知らせが入っていたが、もちろん地下鉄の駅の構内には雪は降らない。しかしその日はあまりにも寒い日だったでせいで、わずかながらも地下鉄の構内まで冷たい空気が入り込んできていた。

透はトンネルの奥に消えていく電車の影を見送る。透は手袋をした両手をこすり合わせてあたためようとしたが、摩擦熱はすぐ逃げていつてしまつて、制服だけではすこし肌寒かった。

（電車の中は暖かくていいなあ、ああ、俺も早く家に帰ってこたつに入りたい）

透は心の中で呟く。しかしすぐ透は自分の心の呟きに首を振った。仕事は今始まったばかりだ。今からそんなことを言っているようでは仕事はさば

ききれないぞ——

幾田透はホオ才。先ほども言つたとおり都内の地下鉄の駅で駅員をしている。家族は妻と娘の三人家族で、娘はもうニニ才。今日は、娘の誕生日だつた。

透は何を娘に贈れば喜んでもらえるだろうか、とずっと仕事中も漠然と考えていた。

（いまどき何を送ればいいんだろうか。俺にはわからないなあ。ゼレネーションガップとか言う奴だ。あれ、ちよつと違ってたっけ？）

透がずっと電車を待つていたとき、慌てた様子で仲間の駅員が駆け寄ってきた。

「末尋町で人身事故があつたらしい、復旧するま

でダイヤが乱れるぞ！」

そこから先はてんやわんやの状況だった。センターの司令室からは次の列車の一時駅停の指示が来る。駅の運行管理室では一つ先の駅の係員との間で、止まっている先行列車の状況を連絡しあった。ホームの列車運行表示は空白になり、臨時の案内表示が流れる。そして改札口では窓口へ、ちゃんと列車が走るのか客からの質問が相次いだ。

数分後、先ほどセンターの司令室から指示があった、あとからの列車が駅に止まった。電車の扉は開いたまま、ずっとそのままだ。構内の冷たい空気が電車の中に入り込む。

「……ただいま末尋町にて人身事故が発生し、復

旧作業のためにダイヤが大幅に乱れております。  
この電車は次の駅に停車中の先行電車が出発次第……」

車内に流れる人身事故の復旧待ちのアナウンスに、音楽を聴いている人もイヤフォンを外し、アナウンスを聞いた人々は疲れたような、そしてあきれたような顔で座席にもたれかかった。

「なんでなんだよ、早く帰りたいのに、あー、俺今日すごい疲れてるんだけど」

「6時まで家に帰れるかな。ここまま帰れないなんてことないよね」

乗客は不機嫌そうに話しあった。なかには、

「人身事故だなんて、どうせホームから身を投げてんだろ。全く死にたきや一人で死ねばいいんだよ。社会に迷惑かけんなよな。他人に迷惑かけんなつての」

とまで言う人もいる。

その言葉を聞いた透は昔、自分に昔線路に身を投げた友人がいたことを思いだした。

ひぐち

その友人の名は比久地ひぐちといい、同じ鉄道員だった。同じ鉄道高校の同じ組で学び、よく話し合った。実際に鉄道会社に就職してからは関係は疎遠になったが、それでも同じ会社で働き、たまには連絡を取り合うこともあった仲だった。

ある冬、もともと疎遠だった連絡がなくなっ**て**しばらくたつてから、伝え聞きでその友人が自殺をしたことを知った。彼は電車が迫る駅のホームで、線路に身を投げたのだった。

動機はわからない。が、透は同じ鉄道員として、同じ年代の友人として思うところはあつた。そして透は思った。

（だれも心配はしない、人が死んでも。気にしてたらしようがない。きりがないからな）

ホームの向こうでは別の駅員が乗客にいちやもんをつけられているのが見える。

「だからいつになつたら動くのかと聞いてるんだ！ この電車は急行なんだぞ！ カメより遅いじゃないか！」

「ですから、次の駅の車両が出発し次第ですね——」

「仕事があるんだよ！ 大事な仕事が！ おまえらはそれをパーにするつもりか！？ 商談がフイになつたら俺はクビなんだよ！ どう落とし前つけて

くれんだよ！おまえらが俺に給料くれんのかよ！」  
その騒動を横目に見ながら、乗客たちもいらだちを募らせている。

「あーもうどうでもいいから早く動かないかな」  
ため息をつく人もいる。車内は険悪な雰囲気になつていた。

列車が止まったままなので暇だった透は、携帯電話を取り出して家に電話をかけることにした。

「――ああ、そうなんだ。今日は遅れそうだな。

ああ、美紗子には済まないと言っておいてくれ。

え、もう子供じゃないんだからそんなこと気にし

ない？ まあ、わかつてるが、一応と思つてな、

うん、じゃ」



電話の相手は妻の香津。娘の美紗子の誕生日を一緒に祝えないことを謝ったのだ。

電話を切ってから透はもう一度線路に向かつてホームに立った。電車はまだホームに止まっていた。開いたままの扉近くで、母親とその足元に小学生になったかどうかといった感じの小さな女の子が手すりをつかんで立っているのがみえる。

「ママー、ふたあけてー」

女の子はペットボトルを差し出して母親に呼び掛けた。

「ちよつと待ってて、今あけるからね」

母親は女の子からペットボトルを受け取ると、マニキュア爪の指先でふたをあけて、

「はい、」

女の子の手に戻す。

「ありがとう。」

そしてペットボトルに口をつけて中身を飲み始めた女の子を見た時、透の脳裏にあることが思い浮かんだ。

娘の美紗子がまだ幼かった頃、鉄道好きの透は電車紀行とかこつけて、家族三人で近隣の都道府県を旅行したことがあった。そしてその旅すがら、美紗子が食べたいと言いだした駅弁を求めて香津を旅館に残したまま、ローカル線に乗り出したことがあったのだ。その時はうだるような暑さの夏だったが、熱による線路異常とか言うことでやはり電車が遅れ、旅館にすら帰れなくなりそうになった。

目的地で買った駅弁を食べながら、透は美紗子に言った

「すまん、美紗子。こんなことならトランプでも持ってくればよかったな。そうしたら遊べたのに。ずっとまってるのは退屈だろう。」  
しかし、幼い美紗子は首を振ると、こう言ったのだ。

「お父さんと一緒にいられるなら、電車が遅れるのもうれしいもん。一緒にお弁当食べれるから楽しいもん」

その時透は驚くと共に、とてもうれしかったのを覚えている。

「そうか、そうか」

そして透はうれしさのあまり美紗子を電車の中で

たかいたかいた。美紗子の頭が天井にぶつかり  
そうなくらいに透は美紗子を高く持ち上げた。

その娘も今は大人になった。

（しようもないことを思い出したな）

と透が思ったとき、透の元に仲間の駅員が駆け  
寄った。

「——そうか、そりゃよかった。ようし！」

透はトランシーバーを取り出す。

「えー、乗客の皆様にお伝えします。いま連絡が  
入りまして、全線復旧したとの情報が入りまし  
た。繰り返します、末尋町駅での人身事故による  
影響のため、ながらく運行を見合わせていました  
が、今入った情報によると全線復旧したとのこと  
です。——」

数分後、あの親子も乗った先ほどの電車は駅のホームを滑り出す。スピードを増す車両と共に、透の勤務時間も、終わりに近づいていた。

（帰ったら、美紗子にあの思い出話でもしてみようか。いや、するまい。したら、変な顔するだろうからな。）

ただ素直に誕生日を祝おう、透はそう思った。

列車の後部車両が走り抜けた。車掌の顔が小さくなっていく。

透はホームの端に歩み寄り、左右をしつかりと確認すると、走り去る電車に大きくランプを振った。

###

Special Thanks : 都営新宿線の鉄  
道員の皆様